

《書 評》

Arjan Zuiderhoek, *The Politics of Munificence in the Roman Empire: Citizens, Elites and Benefactors in Asia Minor*

Cambridge: Cambridge University Press, 2009, Pp. xvii+186.

増 永 理 考

ローマ帝政期の小アジアは、帝国の中でもっとも繁栄した地域の一つであった。小アジア西岸部の都市や周辺の島嶼部は、交易の重要な拠点として、ギリシア古典期からすでに都市の発展が見られる。その経済的重要性ゆえ、諸都市はペルシア帝国、ヘレニズム王朝、そしてローマ帝国に従属させられてきた。しかし、ローマ時代に関しては、属州アジアとされ、総督らが派遣されてはいたものの、それぞれの都市にはある程度の自治が認められていた。

小アジアは、皇帝崇拝を盛んに行った地域の一つとしても有名である。ヘレニズム期以来、支配者崇拝の伝統を持つとされる小アジアの人々は、アウグストゥスが内乱を収めた際、自ら皇帝への崇拝を申し出、それ以降、皇帝のための神殿の建立、皇帝の彫像の制作などによって、積極的に皇帝崇拝を実践した。Simon Price はその著書において、帝国東方における皇帝崇拝は、地方エリートのイニシアティブによって産みだされた、政治と宗教の統合的形態である、と述べている¹⁾。

小アジアの諸都市では、皇帝崇拝の一環として祝祭が開催され、皇帝に捧げる建築物がしばしば建設された。これらはおおむね地方エリートが一部あるいは全額を出費することによって賄われていた。このように、公的なものに関して都市の富裕者がその費用を負担し、「気前の良さ」を示すという慣習は、古代地中海世界に広く見られる現象であり、Paul Veyne がエヴェルジェティズムという分析概念を創始して以来、これを用いて研究が進められている²⁾。こうした「気前の良さ」を示す恩恵施与行為の起源としては諸説あるが、古典期アテナイのレイトゥルギアや、アルカイック期の貴族的贈与交換にまでさかのぼるとされる³⁾。いずれにせよ、ギリシア文化にその原型があるようである。本書は、このエヴェルジェティズムについて比較的長い歴史を持ち、さらに紀元 1, 2 世紀にその激増を経験した小アジアについて、その実態を解き明かそうとした書物である。

論評する前に、簡単に著者について紹介しておこう。Zuiderhoek は、現在ベルギーのセント大学の教授であり、ローマ帝国東方における都市の政治制度や理念を専門としている。特にギリシアとローマの文化的融合が著しい小アジアをフィールドとし、エリートが示す公

的な「気前の良さ」を研究の対象としており、その政治的、経済的側面などに関する論文を精力的に発表している⁴⁾。本書は、それまでの彼の業績を集大成したものであるといつてよかろう。彼の論考の特徴としては、祝祭の開催、公共建築物の建設といったエヴェルジェティズムの個別要素を扱うのではなく、エヴェルジェティズムを総合的なものとして捉え、それが社会に及ぼす影響を考察している点があげられる。それでは、以下、本書の内容について簡単に紹介していく。

本書の構成は次のようになっている。

Introduction

- 1 Introducing euergetism: questions, definitions and data
- 2 The size and nature of gifts
- 3 The icing on the cake?
- 4 The concentration of wealth and power
- 5 The politics of public generosity
- 6 Giving for a return: generosity and legitimization

Epilogue: The decline of civic munificence

Appendix 1: List of source references for the benefactions assembled in the database

Appendix 2: Capital sums for foundation in the Roman east

Appendix 3: Public buildings, distributions, and games and festivals per century

Introduction で著者は、本書の対象や目的を明示している。前近代の格差社会において、どのようにして「気前の良さ」を示すエリートが現れたかという問題意識をもとに、ローマ帝国の中でもとりわけそうした慣行が盛んで、碑文などの史料も豊富に残っている小アジアに焦点を当てることが言明されている。エヴェルジェティズムについて、従来、富の再分配、キリスト教的慈善の前身、そして、エリートと非エリートの社会的距離の強調といったことが言われてきたが、これらは小アジアにおける「気前の良さ」の増大を十分に説明できていない、と著者は述べる。こうした「気前の良さ」を示す流行は、社会的、政治的發展として、都市エリートと非エリートのアイデンティティに基づくリアクションである、ということを明らかにするのが本書の大きな目的となっている。

第1章「Introducing euergetism: questions, definitions and data」では、分析に先立って、問題提起、著者自身のエヴェルジェティズムの定義、そして分析に用いる史料について整理されている。紀元1世紀後半から、3世紀前半にかけての、エヴェルジェティズム激増の理由は何かということの問題として挙げ、エヴェルジェティズムという概念がどのようにして用いられるようになったかに触れた後、本書でのエヴェルジェティズムの定義がなされている。本書では、基本的に都市の富裕な市民と、奴隷や解放奴隷を除外した、それ以外の都市

民間の贈与交換を想定している。奴隷や解放奴隷に関しては、特別言及する必要がある際に議論に含めるとされる。史料については、主に帝政開始期から4世紀にかけて、小アジア全般から出土している碑文に依拠しており、碑文の類型まで明確に図示されている。加えて、本章末では、いわゆる「碑文習慣」の問題に関して、考古学的データなどに基づいて、簡潔ではあるが反論が述べられている。

第2章「The size and nature of gifts」では、有力者による恩恵の数量的規模やその性質について、具体的にまとめられている。帝国政府の税徴収により、属州都市は資金が不足し、インフラなどの財源をエリートの私的な出費に依拠せざるをえなかったという従来の経済的説明に対し、数量的データを示すことで反論を展開する。著者の分析によると、都市への恩恵に充てられるのは、エリートの収入のわずか約3～5%ほどであり、都市経済において、エヴェルジェティズムが支配的ではなかったことが示唆される。さらに、多額の出費をおこなえたのはごく少数の人々に限られ、恩恵の多くは小規模であった。エヴェルジェティズムがキリスト教的慈善の前身となっていたかという問題についても、その恩恵のターゲットが社会の特定の階層に限られており、貧者の生活水準向上という目的はなかったことを強調している。都市経済におけるエヴェルジェティズムの位置づけについては、次章でさらに詳しく検討している。

第3章「The icing on the cake?」では、都市財政におけるエリートの私的貢献はどの程度のものであったかを、およその数値を割り出すことで分析している。ここでは、Hertha Schwarzの研究に依拠しており、都市財政は様々な形態の税金から収入を得ていて、それらによって公的な出費をカバーできていたという見解が出されている。東方の諸都市は、ローマ支配以前から支配する側と都市独自のものという、2重の税システムに慣れ親しんでいた。したがって、諸都市はローマ時代においても全く異なる財政状況に直面することはなく、少なくとも帝政初期には健全な財政が保たれていた。著者は、平均的規模の都市における公的支出の推定額を50,000デナリウスとし、その30~60%を税収だけで賄うことができたと述べる。残りについては、公共の土地、公共事業などからの収入に依存していたと推測している。このようなモデルから、都市はエヴェルジェティズムなしでも通例の支出を賄っており、エリートの私的貢献は経済的には余分なものであったということが示されている。エヴェルジェティズムには、経済的なものというよりは、むしろ政治的、イデオロギー的力学が働いていたのではということ、次章以降、この点について詳細に検討がなされる。

第4章「The concentration of wealth and power」は、エヴェルジェティズムの効果の一つとして、富と権力が恩恵を施すエリートに集中し、それによる社会的影響が論じられる。紀元1, 2世紀、東方諸都市において、エリートと非エリートとの富の格差は増大するばかりであった。政治的にも、都市は少数の富裕な市民によって運営され、寡頭的な統治がおこなわれていた。一方、大規模な恩恵を施すことができるのはごく少数の限られた人々であり、都市エリート内部においても、富の格差は存在しており、それは同時にエリート内での階層

化を意味した。このように、政治的寡頭化、財産格差の拡大によって、都市全体は、その階層化を経験することとなった。こうした状況は、都市における社会的緊張を増大させるものであった。Zuiderhoek は、まさにこうした問題に対して、エヴェルジェティズムが寄与することになったと強調する。

第5章「The politics of public generosity」は、前章で述べられているような都市の階層化、寡頭化という状況に対して、エヴェルジェティズムが正当性を与えていたということを主に論じている。ギリシア系都市は、ローマ帝国下においても変わることなく、統合的な市民共同体という理想を保持し続けていたが、実際の社会は階層化が進む一方であった。こうした都市の社会的分裂に対して、イデオロギー的正当性を与えるものとして、エヴェルジェティズムは理想的道具であったと著者は言う。都市エリートの恩恵のうち最も規模の大きいものとして、宗教的建築物、公衆浴場、体育場といった公共建築物が挙げられるが、これらは統合的市民共同体や「市民」のアイデンティティを醸成する場でもあった。金銭などの公的な分配については、多様な階層の人々が分配にあずかってはいたものの、全配給の40%弱は市民身分に属するものであり、都市参事会員らエリート層への分配も顕著である。これらは、共同体の統合を促進する一方で、都市の階層的性質のイデオロギーを共同体が受容することに寄与している。これらは、基本的に交換のプロセスであり、名誉などの何らかの見返りがともなうものであった。それゆえ、エリートらは多くの見返りを期待して、競って恩恵施与の実践をおこなっていた。

第6章「Giving for a return: generosity and legitimation」では、エヴェルジェティズムによる社会的、政治的正当化について述べられている。現代と比べ死亡率が格段に高かった古代ローマ世界においては、社会的流動性は高く、エリート層は集団、あるいは個人レベルでの特権保持のため、自らの地位の正当化を行う必要があった。そうした正当化は、主に顕彰碑文によってなされていたというのが著者の見解である。ここでは、政治学者の David Beetham による政治的正当化の理論を適用して検討されている。これに従うと、エリートに与えられる碑文は、支配者としてふさわしい道徳性を顕示する理想的な媒体であり、このような恩恵者への名誉は、富裕者による支配に対する被支配者の同意として解釈することができる。また、祖先がなした業績についても、しばしば顕彰碑文に記載されている。ギリシア・ローマ社会では、都市にとって名誉ある人物の子孫であることそれ自体が、地位の正当化に役立つものであった。加えて、エリートによる非エリートに対する経済的な搾取などがおこなわれていなかったことも、エリートによる支配を容易に受容させ、その正当化に貢献している、と最後に著者は指摘している。

最後の Epilogue: The decline of civic munificence では、3世紀のエヴェルジェティズムの衰退について簡潔にまとめられている。3世紀、キリスト教共同体が徐々に拡大し始め、それともなうて、教会的ヒエラルヒーが出現し、都市の政治文化は緩やかではあるが、大きな変化を経験していった。もしエヴェルジェティズムが富や政治権力の増大する不平等に対

する政治文化的反応であるなら、このような傾向は、官僚制の拡大や、とりわけキリスト教の普及といった変化の影響によって、次第に衰退していったのであろう、と推測される。しかし、少なくとも1、2世紀のローマ帝国における安定的機能に、エヴェルジェティズムは重要な貢献をなしたとして、本書は結ばれている。

以上、本書の内容について紹介してきたが、次に本書を読んで評者が議論を深めるべきと感じた論点を提示しよう。Zuiderhoekは本書を通して、史料から判別しうる限りの数値をもとに、都市やエリートの財政状況の平均的モデルを設定し、これをもとに議論を進めている。それゆえ、小アジアの都市のイメージが明確化され、議論に説得力をもたせている。こうした数値をもとに、経済的観点から、当地域におけるエヴェルジェティズムが都市財政的にも余分なものであったという見解を示している点は、今後のエヴェルジェティズムに関する議論のために重要な論点の一つとなるであろう。

しかし、評者は、著者の示した平均的モデルが統計的にどれほど有効か判断しかねるためでもあるが、一般化されたモデルが果たして実態を反映しているかという疑問を感じた。確かに、彼の提示するモデルは実際の碑文史料から割り出しているものではあるが、そのモデルに見合う実際の都市は存在していたのであろうか。少なくとも、本書においては、平均的な数値に合致する都市の例は示されていない。彼の一般化がより説得的なものとなるためには、もし存在するのであれば、そうした都市の事例が示されることが望ましいだろう。小アジアといっても、交易などで栄えた沿岸部、島嶼部の都市と、内陸の都市とでは、その規模においても、そして経済的にも大きな差があるので、彼の示すモデルとは対極をなす都市についても、検討が必要である。そうすることで、小アジアの都市イメージはより立体的なものとなると思われる。

これらの点と関連することだが、一般化による弊害として現れる問題の一つは、都市の個別事情の軽視である。多様な都市が存在した小アジアだからこそ、都市独自の何らかの背景がその都市のエヴェルジェティズムに影響を与えたということは十分考えられることである。本書において、いくつかの都市の例は挙げられてはいるが、その都市の文脈についてはあまり検討されていない。この点は、エヴェルジェティズム自体が、古代世界に広く見られる現象として捉えられ、一般化の方向に傾きがちなことに問題があるのではと評者自身は感じている。確かに、恩恵施与という意味では一般化できるかもしれないが、与えられるものそれぞれの効果はもちろん異なっており、それらを享受する人も違っているはずである。例えば、祝祭や見世物の開催は恩恵者自身もその享受者となっており、エリートと都市の間の単なる交換のプロセスとして見ることはできないだろう。一般化によって漏れ落ちた部分、つまり、それぞれの状況に応じた微妙な差異を見出すことが必要である。

以上述べてきたことと、平均的モデルを割り出し、それをもとに分析を進めていく手法とを両立させることは困難であるかもしれないが、エヴェルジェティズムの実態を捉える上で、今後の課題となっていく点と評者には思われる。

本書の大きな目的は、初めにも述べたように、1, 2世紀の小アジアにおけるエヴェルジェティズム増加の要因を探ることであった。しかし、このことと同様にエヴェルジェティズムが減少していく過程もまた一つの大きな問題であろう。この点について著者は、エピローグにおいてわずかばかり検討をおこなっている。エヴェルジェティズムが変化していく要因としてキリスト教の伸張が挙げられている点は、目新しくはないが⁵⁾、エヴェルジェティズムとキリスト教的慈善行為との間には、恩恵の対象という点で、連続性はなかったとしている。この点は、3世紀におけるローマ帝国内における変化を考えるうえで、一つの重要な論点をなしているといえよう。これは、エヴェルジェティズムの経済的側面、すなわち富の再分配という問題にかかわることである。エヴェルジェティズムが単なる消費であったか、あるいはそれによってさらなる利益を生み出すことができていたのか、史料から抽出することは困難であるかもしれない。しかし、著者のいうように、エヴェルジェティズムが経済的に余分であったとしても、多額の金銭が動くことなので、何らかの経済効果があったことは想像に難くない。経済的にみて、エヴェルジェティズムはキリスト教共同体に継承されなかったという著者の見解に従うならば、その経済的側面はエヴェルジェティズムの減少期に最も影響を受けたものの一つであると考えられる。したがって、今まで焦点をあまり当てられてこなかったエヴェルジェティズムの変容期、あるいは衰退期の状況を分析することによって、少なくとも経済的側面についての実態が明らかになるのでは、と評者は考えている。

最後に挙げる論点は、ローマ帝国内における小アジアの位置づけという問題である。本書は、小アジアの位置づけについて言及せず、閉じた世界の話として完結している、という印象を評者は受けた。そもそも1, 2世紀の小アジアを考える上で重要であるのは、皇帝との関わりである。本書でもわずかばかり触れてはいるが、両者の関係についての検討はなされていない。前述のように、小アジアは皇帝崇拝が盛んな地域の一つであり、ハドリアヌス帝の帝国東方周遊などによって、その熱は一層高まった。エフェソスやスミルナなど、小アジア内の大きな都市では、競って“temple warden”，すなわち「神殿管理都市」の称号を得ようとして、皇帝のための神殿の建立などを行った⁶⁾。これもエヴェルジェティズムの一環と考えるなら、都市という、より狭い状況を越えた、皇帝、つまりローマ帝国とのつながりも考慮すべきである。ローマの諷刺家ユウェナリスが残した「パンとサーカス」という言葉⁷⁾は、エヴェルジェティズム、さらにはローマ帝国の社会状況を考える上で重要な一つの問題である。ローマ帝国下における「パンとサーカス」を考える過程の一つとして、ローマ帝国内での小アジアの存在、さらにはそこでのエヴェルジェティズムの位置づけを見出すことが、本書から見えてきた学界の、そして評者自身の課題である。

本書は、エヴェルジェティズムの問題だけでなく、小アジア地域の都市の状況についても様々な点で示唆的な見解を提示している。エヴェルジェティズムを通して、都市の経済、政治、そして文化といった多岐にわたる側面が浮き彫りにされているといえよう。小アジアでは現在も考古学的発掘が進められており、史料の増加を大いに期待できる地域である。本書

からは、上述のように課題も見えてきたのであるが、今後、当該地域を研究していくうえでの、一つの転換軸をなすものとして本書は位置づけられる、そのように評者は考える。

Historische Literatur (H-Soz-u-Kult 出版) 上に Muriel Moser による本書の書評がすでに発表されている。拙評と趣の異なる書評であり、あわせて参照いただければ幸いである。

註

- 1) Price, S. R. F., *Rituals and Power: the Roman Imperial Cult in Asia Minor*, Cambridge, 1984.
- 2) Veyne, P., *Le pain et le cirque: sociologie historique d'un pluralisme politique*, Paris, 1976.
- 3) *Ibid.*, pp.186-228.
- 4) 著者情報に関しては、ゲント大学のホームページを参照。
(URL:<http://www.ugent.be/lw/geschiedenis/en/contact/staff-members.htm/personal-pages/arjan-zuiderhoek>)
- 5) 例えば、Brown, P., *Poverty and Leadership in Late Roman Empire*, Hanover and London, 2002.
- 6) Dmitriev, S., *City Government in Hellenistic and Roman Asia Minor*, Oxford, 2005, pp.247-286; Friesen, S., 'The Cult of the Roman Emperors in Ephesos: Temple Warden, City Titles, and the Interpretation of the Revelation of John', in Koester, H. (ed.), *Ephesos, Metropolis of Asia: An Interdisciplinary Approach to Its Archaeology, Religion, and Culture*, Harvard Divinity School, (2004), pp.229-250.
- 7) Juv, *Saturae*. X. 80.